

# 幻の花見

川崎ゆきお

「今年は花見に行かれましたかな」

「ああ、桜の」

「行かれましたか」

「花は、まあ、毎日見てますよ」

「やはり、花見と言えるのは桜でしょ」

「そうですねあ。花は桜に人は武士ですねあ」

「それで花見は」

「花見ねえ。近所の桜は見ましたが、これじゃ駄目でしょうなあ。花見の宴に参加しないと。しかし、もうお呼びがかからない。誘ってくれる人もいない。だから、今年はまだ行ってません」

「そうですか、じゃ、ご一緒にどうですか」

「え、あなたと」

二人は散歩中、自販機の前でよく合う程度の仲で、何処の誰だか互いに知らない。しかし、毎日のように顔を合わす。散歩でこの自販機前に来る時間が同じなのかもしれない。そのため、互いに出る時間をずらすと、遭遇しない。

二人共自販機で缶コーヒーを買う。この偶然も珍しい。水分を補給しなくてはいけないほどの散歩距離ではないので、ただのコーヒー好きなのかもしれない。しかし、二人共そうだというのは、これも珍しい話だ。

ただ、この二人が遭遇する前は、自販機で缶コーヒーを買うのは毎回ではなかった。

ある日、自販機前のベンチで缶コーヒーを飲んでいると、もう一人の散歩人も同じように横に座り、缶コーヒーを飲みだした。同じパターンだ。

そして、一言二言話すようになる。

やがて、互いに意識するようになったのか、あの時間あそこへ行くと、あの人がいるのではないかと、思うようになった。

これも互いにそうだったようだ。

この二人、風貌もよく似ている。着ているものも似ている。

会話といっても、大した話ではなく、差し障りのないような、天気の話や、近くにある店屋の話や、たまに政治や経済の話、病気の話などをするが、それほど突っ込んだ内容ではない。

これは変だと、一方が気付いた。もう一方も、それを感じた。

「山桜などはどうですか」

「ああ、いいですねあ」

「少し山に入るので、歩きますが、大丈夫ですか」

「ああ、大丈夫ですよ。こうして毎日歩いているので、足は達者です」

「そうですか、で、弁当などいらなんでしょう」

「そうなんですか」

「面倒でしょ。その辺で買えばいいし、茶店も出ているので」

「はい、分かりました。行きましょう」

「それは有り難い。実は私も誰からもお誘いが無い口でしてね。で、一人では寂しいので、誰か

と行きたかったのです」

「私もそうです。本当は行きたかったのですよ」

「それはいい。じゃ、決まりですね」

「はいはい、よろしく」

二人は日時を決め、別れた。

当日は近所の散歩には出掛けず、待ち合わせの駅前へ二人共向かった。

そして、一方の言うことには、片一方が来なかったとか。

当然、もう片一方も同じことを言っていた。

その後、あの自販機の前を通っても、二人は出会うことがなかった。

それで、あのベンチで缶コーヒーを飲む習慣も徐々になくなった。

二人は互いに思い出す。あの人は何だったのかと。

了